



トゥインクル と スパーキー

そら 空の はるか かなたに、トゥインクルと スパーキーという
ほし 星が あった。この ふたつの ほし 星は たい なか よ 仲良しだった。

トゥインクルは ちい 小さな ほし 星だったので、
いっしょうけんめい かがや 輝いても、ま 真っ暗な
よる 夜にしか み 見えなかった。それに くらべて

スパーキーは おお 大きな ほし 星だったので、
ゆうがた 夕方から よる 夜に かけて、さらに
よ あ 夜明けまでも かがや 輝き続けた。

トゥインクルと スパーキーは、はるか
かなたに いる だれかが じぶん 自分たちを
み 見ているのかと おも 思うと、

いっしょうけんめい
かがや 輝きたいと
おも 思ったんだ。

トゥインクルは、自分も スパーキーのように もっと 明るく 輝けたらなあ、と 思うことも あったけど、決して 不平を 言うことは なく、いつも 陽気だった。神様が 何かの 目的で 自分を そのように 造られたと 知っていたからだよ。スパーキーも、特別な 目的で そのように 造られているんだ。

トゥインクルは、たとえ 自分は 最高に 明るい 星では なくても、とにかく 自分の 最善を つくして 輝けるだけ 輝こう、そして 自分が 放てる 光を 神様に 感謝しよう、と 決心したんだ。

ある日のこと、神様は スパーキーの 特別な 任務が 何かを 彼に 告げた。 いたいな 人 アブラハムのために、神様が アブラハムの 忠実さを 喜ばれている しろしとして 輝く 星たちの ひとつに なるよう、命じられたんだ。

スパーキーは とても わくわくしたよ。トゥインクルも、その時に なったら スパーキーは 最善を つくして 美しく まばゆいばかりに 輝くだろうと わかっていた。 けれども、トゥインクル自身は まだ スパーキーのような 特別な 任務に 召されては いなかったの、少しばかり 悲しくなったんだ。それで、 (ぼくは 十分 明るくないから、スパーキーのような 特別な 任務に 加われないんだ) と 思った。でも その時、良いことを 思いつき、 トウインクルは ほほえんだ。(もし がんばって 輝き続けていれば、そして、 アブラハムのように 忠実で いれば、神様は ぼくにも 何か 特別な 任務を 与えてくださるに ちがいない) と 思ったんだ。そこで トウインクルは 元気を出し、神様が 下さった 光を 感謝し、最善を つくして 輝き続けることに したんだよ。

「神様、あなたのために 明るく 輝けますように。スパーキーみたいに 明るくなくても、満足していられますように。」 トウインクルは そう 祈った。

さて、スパーキーが アブラハムへの 神の しろしとして 明るく 輝く、この 大切な 使命を 果たす 重大な 日が やって来た。

トゥインクルは、他の 星たちが 美しく キラキラ 輝きながら 光の ショーを するのを見ていた。自分が いちばん 明るい 星で なくても、神様は 同じように 自分を 愛してくださっているのだと 思うと、ほかの 星たちが とても 美しく 輝き、まばゆい 光を 放っているのを ながめながら、幸せな 気持ちに なったよ。

そして、たくさんの 星が 自分のために 輝いて いるのを 地上から ながめている アブラハムのことを 考えると、思わず ほほえんだ。



その時だ。トゥインクルが
自分を 呼ぶ 声を 聞いたのは。

「トゥインクル、明るく 輝いてくれる
星が もうひとつ 必要なんだ。そのために、
おまえの 輝きを 増してあげよう。」

神様は そう 言うと、トゥインクルに ふれた。すると、
この 小さな 星は 輝きを より いっそう 増した。

「神様、ありがとう！」 ほほえみながら そう
言うと、トゥインクルは スパーキーや ほかの
仲間たちに 加わった。そして、今までに ないほど
まばゆいばかりの 光を 放ったんだ。

教訓：君が、わたしが 造った ありのままの 自分を 感謝し、
その中で 自分に できる 最善を つくすなら、わたしは とても
うれしくなる。そして、君も 幸せに なれるんだよ。わたしは、君の
祈りと 賛美を 聞いているからね。前向きな 気持ちに なるなら、わたしは
君が 最高に 幸せに なれると わかっている 方法で 祝福しよう。－イエスより

知っていたかな？

聖書には、あらゆることで 神様に 従った 忠実な 人として、アブラハムのことが 書かれて
いるよ。アブラハムと 妻の サラには 子供が いなかった。だけど、アブラハムは 神様に 対して
大きな 信仰を 持っていたので、神様は アブラハムと サラに 子供を 下さると
約束して くださったんだ。

そして 神様は、アブラハムに 空を 見上げて 星を 数えてみよと
言われた。アブラハムが、あまりにも 多すぎて
数え切れませんと 答えると、神様は、その 数え切れない
星のように、彼の 子孫も 数え切れないほど
多くなつて、アブラハムは 大きな 国の
祖先に なるだろうと 言われたんだよ。

